

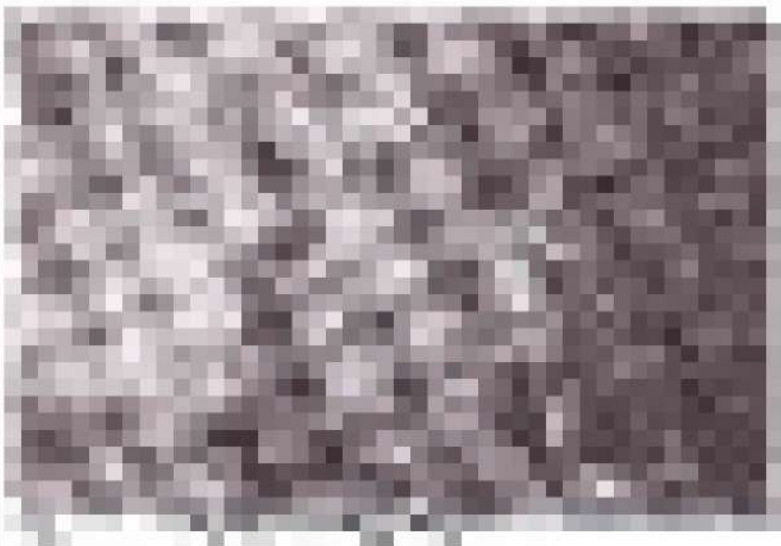
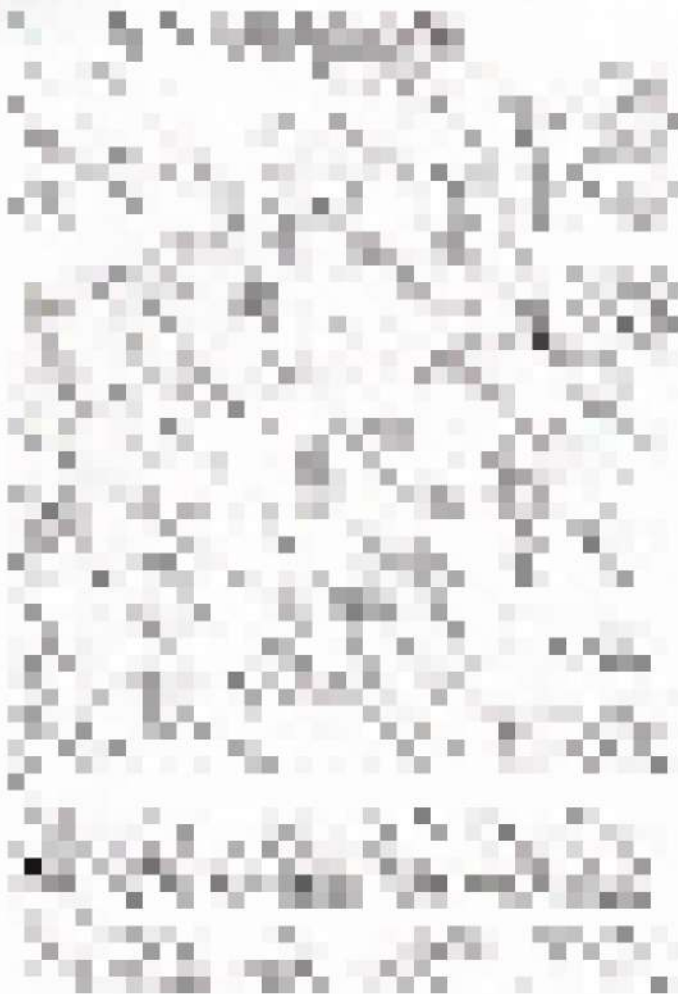
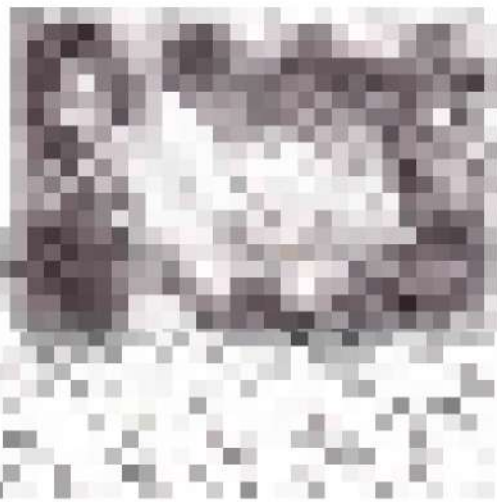
## アーノクールの《魔笛》、 W=メストの《フィガロの結婚》

チューリヒ歌劇場 モーツァルト・オペラ現地レポート

2月●チューリヒ

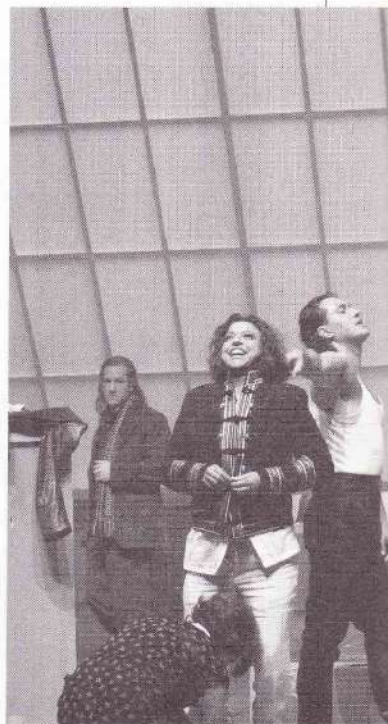
取材・文=岡本 稔、中 東生

写真=Hans Jörg Michel(《魔笛》)、Suzanne Schwiertz(《フィガロ》)



### 満足度高い《フィガロの結婚》プレミエ

とにかく楽しいオペラだった。性的ギャグが多く、多少度が過ぎてはいたが、観客の笑いを幾度も誘い、ブーイングも出なかったので、大方受け入れられたようだ。歌手陣が芸達者で、舞台姿も様になる人選だからこそ、この演出が生きたのだろう。スピード感が心地よかった。序曲の途中で幕が開いた舞台の上には、マッチョな上半身裸のフィガロ(シュロット)、何度も下着姿になるスザンナ(ヤンコヴァ)に続いて、トランクス姿のケルビーノ(シュミット)、自分でスカートをまくりあげながら登場するバルバリーナには驚かされた。ここまではなんとか理解できるとしても、マルチェリーナまでブラ姿になる必要があるかは、全く不可解だ。伯爵(フォッレ)を愛嬌のある手品狂に仕立て上げるにより、上流階級の威厳を失わせ、演出チームが意図した通り、彼とフィガロの間に「身分の差を越え、同じ運命を持った同性同士」の絆を感じさせていたのが印象的だった。ヴェルザー=メストは面白味には欠けるが、確信に満ちたモーツァルトを聴かせた。オケピットを底上げしたためか、オケが鳴り過ぎ、あまり声量がある歌手陣ではないだけに、声をかき消していた部分が多く、また、ミスも少なからず目立ったが、アクセントをきかせ、引き締まった音楽を奏でていた。その歌手陣にも、レチタティーヴォをスピーディに処理させ、それが繊細に富んだ演出をより鮮やかにしていた。それなのに、アリアになると、イタリア語の発音が奥に入り過ぎ、聞きにくいのは残念だ。シュロットがテンポを引っ張るきらいがあったこと、脱スープレットに成功した伯爵夫人役デビューのハルテリウスが、2つのアリアで、フレーズの出だしの音程をずり上げる欠点が見られたこと、やはりスザンナ役デビューになるヤンコヴァも健闘していたが、声が弱いため、アンサンブルの中では重要な最高音が欠けることが多く、バランスが悪かったことも気になった。だが、全般的に見れば、小粒だがよくまとまっていて、満足度が高い。来日公演演目に入っていないことが残念なくらいだ。(中 東生)



(《フィガロの結婚》より)J.シュミット(ケルビーノ)、E.シュロット(フィガロ)